

には空腹時血糖 100 mg/dl, HbA1c 5.2%とコントロール良く, インスリン療法から離脱できた. 抗 GAD 抗体, ICSA は陰性, 内因性インスリン分泌は保たれ, IDDM は否定的と考えた.

ペットボトル症候群は, 清涼飲料水ケトosisとも呼ばれ, NIDDM の素因を持つ者が清涼飲料水多飲により, インスリンの感受性低下, 相対的分泌低下をきたし, 糖毒性により悪循環に陥り発症すると考えられる. 今後の病態の長期的推移の観察が必要と思われる.

12) 多彩な臨床症状を呈したヘモクロマトーシスを合併した NIDDM の一例

本間 信之・金子 奈々子
山田 聡子・金子 晋
鈴木 克典・中川 理
谷 長行・相澤 義房 (新潟大学第一内科)

症例: 36歳男性. 89年, 再生不良性貧血と診断され, 免疫抑制剤, 輸血等の治療開始. 91年, 糖尿病と診断され, 二次性ヘモクロマトーシス (HC) が疑われた. デフェロキサミンにて血清フェリチンは低下した. しかし外来にて体重増加, インスリン必要量の増加を認めたため, 98年1月当科入院. 食事療法で血糖コントロールは良好となったが, インスリン総量は治療前後で不変であった. アルギニン負荷テストでグルカゴンの過剰反応認め, 他に十二指腸の嚢胞と両側大腿骨頭壊死を認めた. 考案: ヘモクロマトーシスでは耐糖能異常を来しやすく, その機序に膵β細胞からの鉄沈着によるインスリン分泌の低下と末梢でのインスリン抵抗性が考えられる. 本例では, 後者の関与が疑われた. また合併症の予防に早期の除鉄の重要性が示唆された. 大腿骨頭壊死は, ステロイドの副作用によるものと考えられたが, 嚢胞の原因は不明であった.

13) 筋緊張性ジストロフィー症に合併した糖尿病の2症例

阪田 郁・赤岩 靖久
茂呂 寛・金子 佳賢
桑原 克弘・笠井 昭男
柄澤 良・木村 秀樹 (新潟大学医学部)
鈴木 芳樹・荒川 正昭 (第二内科)
桑原 武夫・田中 恵子 (同 脳研究所神経内科)
辻 省次

筋緊張性ジストロフィー (Myotonic dystrophy: MyD) に合併し, 多量のインスリンを要した糖尿病の2例を経験した. 症例1: 27歳女性. 22歳で糖尿病発症, 23歳でインスリン療法を開始し, 24歳で MyD と診断された. また, 白内障, 胆石症, 睡眠時無呼吸症候群の合併を認めた. 症例2: 56歳女性. 38歳で糖尿病, MyD, 白内障と診断され, 54歳で胆石症, 睡眠時無呼吸症候群と診断された.

MyD の糖尿病合併率は9%前後で, インスリンを要する症例は稀と報告されているが, 本2例とも多量のインスリンを必要とした. 原因として, 筋力低下による運動制限, 知能低下による食事・インスリン療法の不徹底, 末梢組織でのインスリン抵抗性などが考えられた. 現在 MyD に対する有効な治療はなく, 合併症が予後決定因子となるため, 今後も慎重に管理していく必要がある. また, 糖尿病と MyD の遺伝子異常の関連を検討する必要がある.

14) 糖尿病と癌

—当院10年間のまとめ—

岡田 節朗 (下越病院内科)

目的: 当院糖尿病患者の癌発見の実態を調査し, 今後の癌早期発見方針の参考とする. 対象: 当院で治療管理されている糖尿病患者980名 (中断者含む) 中, '88年4月より '98年3月までに発見された癌患者53名. 男37名 (平均年齢 68.3才), 女16名 (平均年齢 78.5才). 方法: 癌の早期発見の目的で癌定期検査 (胸部レ線, 腹部エコー, 胃カメラ, ヒト Hb 便潜血) を年1回勧めた. 癌発見に至るまでの経過と転帰を, カルテにより調査し癌定期検査の効果判定をした. 結果: 年1回の胃カメラでは13例中12例が早期癌であった. 便潜血定期検査年1回では, 2例中1例が早期癌であった. 定期検査未実施で症状出現4例中3例が進行癌であった. 考察: 胃癌・食道癌に関しては, 年1回の胃カメラ定期検査が早期癌発見に有効と思われる. ヒト Hb 便潜血は, 未実施者の中から進行癌が出ており, 検査率を上げる必要があると思われる.